

和歌山県沿岸部における津波碑の分布

The Tsunami Monuments Distribution along the Coast of Wakayama Prefecture

石橋 正信¹・前田 正明²・今井健太郎³・高橋 成実^{3,4}
馬場 俊孝^{3,5}・大林 涼子³・稲住 孝富³

1. はじめに

和歌山県沿岸部は、これまでに発生した津波により様々な被害を受けてきた。そのため、沿岸部には過去の津波に関する石碑（以下、「津波碑」という）が多く存在する。津波碑には、津波被害の犠牲者を供養するものや津波の到達を記録したもの、津波災害の惨事の悲惨さを記したものなどがあり、どの津波碑も、当時の被害状況を後世に伝え、今後発生するであろう地震津波の被害を軽減させたい

という思いをもって、先人が残したものである。

これらの津波碑には、津波防災に有用な教訓等が刻まれているが、和歌山県内の沿岸集落の過疎化により、これらの情報が風化する可能性がある。そのため、津波碑に記されている内容を整理し、後世に受け継いでいくことは地域の津波防災上、極めて重要であるといえる。さらに、これらの遺構から先人の思いをしっかりと学びとり、次の地震の際は、決して想定にとらわれることなく最善を尽く

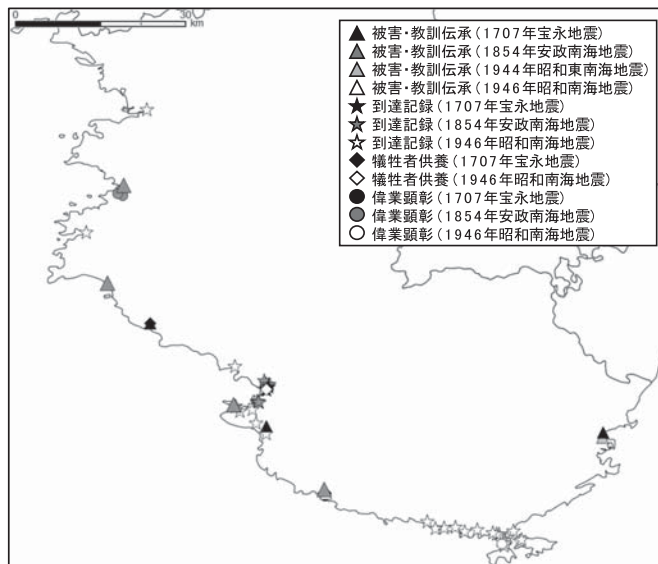


図-1 和歌山県沿岸における津波碑の分布

¹ 和歌山県

² 和歌山県立博物館

³ 国立研究開発法人海洋研究開発機構

⁴ 国立研究開発法人防災科学技術研究所

⁵ 徳島大学

し率先して避難を行うことが必要である。

本稿では、和歌山県沿岸部に在る津波碑(和歌山県立博物館, オンライン)の位置情報や標高値を取得し、碑に記されている内容から津波碑を特性ごとに分類した結果を報告する。なお、羽鳥(1980)により紹介されている津波碑もあるが、位置情報も含め、改めて紹介することにする。

2. 和歌山県沿岸の津波碑

和歌山県沿岸部に点在する津波碑の多くは、1707年宝永地震津波、1854年安政南海地震津波と1946年昭和南海地震津波による。ただし、和歌山県の地理的特性上、潮岬より東部には1944年昭和東南海地震津波によるもの、昭和南海地震と共に1960年チリ地震津波を記録したものもある。図-1に和歌山県沿岸における津波碑の分布を示す。津波碑に記載されている内容から、その特性を4種類に分類した。

- ①被害・教訓伝承：被害状況の伝承や被災経験をもとに将来の災害に対して警告を発するもの
- ②犠牲者供養：犠牲者の供養を目的としたもの
- ③災害復興の偉業顕彰：災害復興に尽力した人物の偉業を顕彰したもの
- ④到達記録：津波の到達点や津波水位を記録したもの

津波碑は和歌山県下に54基あり、津波被害が甚大であった田辺市、白浜町や串本町に集中している。その多くは津波到達記録に関する碑であり、市町村や自治会等によって建立されたものである。前述の特性分類別の碑点数は、被害・教訓伝承が6基(11.1%)、到達記録が43基(79.6%)、犠牲者供養が2基(3.7%)、災害復興の偉業顕彰が3基(5.6%)である。

2.1 被害・教訓伝承

本節では、被害・教訓伝承に関する碑の諸元について記述する。表-1に被害・教訓伝



写真-1 高波溺死靈魂之墓(左)と津浪溺死靈名合同位牌(右)



写真-2 大地震津波心得の記

承に関する津波碑の諸元を示す。

(1) 高波溺死靈魂之墓

印南町印南の印定寺境内に安置されている高波溺死靈魂之墓(写真-1)は1707年の宝永地震による津波によって亡くなった印南地区の方々の合同墓として、1719年に建立された。津波による被害の悲惨な状況が碑の左側面に、印南地区における津波の高さが碑の背面に記載されている(札の辻は、現在の印南町大字印南字浜1808番地である)。印定寺の本堂には、宝永地震津波で犠牲になった

表-1 被害・教訓伝承に関する津波碑の諸元

名称	地震津波名	建立年代	緯度	経度
高波溺死靈魂之墓	宝永	1719年	33.81665	135.21870
大地震津波心得の記	安政南海	1856年	34.03463	135.17727
津浪之紀事	安政南海	1862年	33.88022	135.15170
為後鑑	安政南海	1857年	33.55408	135.49417
大津波記念之碑	昭和東南海	1950年	33.63629	135.93414
津波乃碑	昭和南海	不明	33.54783	135.49607

162名の津浪溺死霊名合同位牌が安置されている。

以下に石碑に刻まれている解釈文（印定寺による）を記す。

正面：高波溺死靈魂之墓

左側面：時は宝永四年初冬四日午の下刻に大地震があって、山が崩れ地は裂け同未の上刻、凹凸とした津波が上がってきた。家財・牛馬は言うにおよばず、流死した老若男女の人々はおよそ百七十余人になった。近くで見た人はもちろん遠くで聞いた人もたいへん哀れに思った。

背面：当地の波の高さは札の辻で六尺（一・八メートル）余り、印定寺山門で二尺（六十センチメートル）余におよんだ。波は山口まで達した。

右側面：享保四年十月初旬の四日にこれを建てる。

（2）大地震津波心得の記

湯浅町中心部の深専寺山門横にある碑「大地震津波心得の記」（写真-2）は1856年に建立され、その碑文には1854年安政南海地震津波の被害状況が記されている。この津波の際には、昔からの言い伝えである井戸の水の減少や濁りなどの「津波の前兆」がなかったこと、また、船に乗り逃げようとした人が被害に遭ったことから、「井戸水の増減などにかかわらず、今後万一、地震が起これば、火の用心をして、その上、津波が押し寄せてくるものと考え、絶対に浜辺や川筋に逃げず、この深専寺の門前を通って東へと向い、天神山の方へ逃げること。」と記されている。本碑は和歌山県指定史跡に指定されている。以

下に石碑に刻まれている解釈文を記す。

大地震津なみ心えを記す碑

嘉永七（一八五四）年六月十四日、深夜三時頃、大きな地震が起こり、翌日の十五日までに三十一、二度揺れ、それから小さな地震が毎日のように続いた。六月二十五日頃になってようやく地震も静まり、人々の心も落ち着いてきた。

しかし、十一月四日、晴天ではあったが、午前十時頃また大きな地震が起こり、およそ一時間ばかり続き、瓦が落ち、柱がねじれる家も多かった。河口には波のうねりが頻繁に押し寄せたが、その日も大きな被害などもなく、夕暮れとなった。

ところが翌日の五日午後四時頃、昨日よりさらに強い地震が起こり、南西の海から海鳴りが三、四度聞こえたかと思うと、見ている間に海面が山のように盛り上がり、「津波」というまもなく、高波が打ち上げ、北川（山田川）南川（広川）原へ大木、大石を巻き上げ、家・蔵・船などを粉々に砕いた。その高波が押し寄せる勢いは「恐ろしい」という言葉では、とても言い表せないものであった。

この地震の際、被害から逃れようとして浜へ逃げ、或いは船に乗り、また北川や南川筋に逃げた人々は危険な目に遭い、溺れ死ぬ人も少なくなかった。

既に、この大きな地震による津波から百五十年前の宝永四（一七〇七）年の地震の時にも浜辺へ逃げ、津波にのまれて死んだ人が多数にのぼった、と伝え聞かすが、そんな話を知る人も少なくなかったので、この碑を建て、後世に伝えるものである。

また、昔からの言い伝えによると、井戸の

水が減ったり、濁ったりすると津波が起こる前兆であるというが、今回（嘉永七年）の地震の時は、井戸の水は減りも濁りもしなかった。

そうであるとすれば、井戸水の増減などに関わらず、今後万一、地震が起これば、火の用心をして、その上、津波が押し寄せてくるものと考え、絶対に浜辺や川筋に逃げず、この深専寺の門前を通過して東へと向い、天神山の方へ逃げることに。

恵空一菴書

(3) 津浪之紀事

美浜町中央公民館浜ノ瀬分館の敷地内にある「津浪之紀事」の碑（写真-3）は1854年の安政南海地震の津波被害の経験を鑑み、大地震の際の心得を後世に伝えるため、1862年に建立された。大地震には津波を伴うものであるから、大松原の小高いところへ避難すべきで、決して、川中に船などで逃げないよう記されている。当地には、当初蛭子神社が建立されておりその境内に碑があったが、現在は、美浜町中央公民館浜ノ瀬分館が建っている。

以下に石碑に刻まれている解釈文（和歌山県立博物館，2015a）を記す。

正面：津波の記録

後世に大きな地震が起きた時は、必ず津波も起こると心得て、浜中の人々は、大松原の小高い場所へ寄り集まっていること。そうすれば、高波の心配も地震の恐れもなくなるはずである。船などで逃げようとしてはいけない。すべての人は、このことをおろそかにしてはいけない。

それにつけていえば、嘉永七年十一月五日に大地震が起こり、続いて津波が起こった。最初に地震を避けようとして船に乗って川の中にいた人が沈んでしまったことは、歎かずにはいられない。故に、後世のため、そのあらましを記録した。

時に文久二年夏五月良日

側面：世話人 当所 木村理三郎

背面：藤井 瀬戸佐一郎 義健が建立する



写真-3 津浪之紀事



写真-4 為後鑒

(4) 為後鑒

すさみ町周参見の大日山の山頂付近に鎮座している「為後鑒」の碑（写真-4）は、1854年の安政南海地震による津波の際に、山崎地区（すさみ町周参見）の住人が、大日山の山上に逃れ助かったことから、そのことを後世に伝えるために1857年に建立された。

以下に石碑に刻まれている解釈文（和歌山県立博物館，2016）を記す。



写真-5 大津波記念之碑



写真-6 津波乃碑

正面：安政元年十一月五日申の刻（午後四時ごろ）、突然大地震裂け、津波激しく襲い、家屋が浸水した。災害は言い切れないほど多かった。しかし、山崎村は山嶽を背にし、山上には小さな祠があり、大日如来が安置されている。村民はこの場所に避難し、みんな命が救われた。想うに、まさに仏力の擁護と村民みんなの信仰のおかげである。村民が一日話し合っ、て、仏恩に報いるために、一基の碑を建て、その概要を記すことにした。永く忘れないでいてほしい。

背面：時に安政四年丁巳正月十五日

山崎住人が建立する

補助 諸白屋金次

梅屋治助

石工 久保嘉三

(5) 大津波記念之碑

那智勝浦町天満の天満神社鳥居の横に「大津波記念之碑」はある（写真-5）。碑の裏面には、1944年の昭和東南海地震の津波による那智勝浦町天満地区周辺の被害や悲惨な状況が記されている。また、1946年にも同様の災難（昭和南海地震による津波被害）があったが、時が経てば人々の記憶も薄れるので、過去を思い起こすために碑を立てたと記

されている。本碑是那智勝浦町指定文化財に指定されている。

以下に石碑に刻まれている解釈文（和歌山県立博物館、2015b）を記す。

正面：昭和十九年十二月七日午後二時過ぎ、突然大地の底をえぐる怪しい音が起こり、息をのんだ次の瞬間、にわかには起こったむごたらしい状況、天も地も崩れるような大地震に襲われた。倒れる音、ひしめく響き、泣く声、叫ぶ声が街にあふれ、野に満ちて、山に続く。さらに、ばけものの叫び声だろうか、我々の耳を打つ。津波が来て、錦の浦の海を傾け、なだれのようにやって来る。激しい荒狂の波が、すべての町をのみ込むかのように荒れ狂う。醜い渦潮があらゆるものに牙を向け、無理やり押し破り、なぎ倒し、天満・須崎・高岸の集落にまっしぐらに進む。ああ、先祖が誇った田畑二十七町（二十七畝）がだめになり、百十七軒が家を失う。親子が捜し合う間もなく、九人の尊い命が海の藻くずの下に消え去ったのは悲しいことだ。昭和二十一年十二月にも同じ災難（南海地震）があったが、地震発生から時間がたてば、人の記憶も薄れていくので、碑を建てて、過去を思い起こさ

せることにする。中森亮順が書き記す

(6) 津波乃碑

すさみ町周参見にある萬福寺の境内には、昭和南海地震の津波によるすさみ町内各地の被害状況が記された「津波乃碑」がある(写真-6)。沿岸部の被害が甚大であり、見るに耐えないほどであったことや、津波の安全地帯として、「小学校・萬福寺等なり」と具体的な津波避難先が記されている。碑文の詳細は以下である。

正面：昭和 21 年 12 月 21 日午前 4 時 20 分、突如大地震が起こり、その直後 10 分ほどで海嘯を伴う津波が数回襲来し、津波の高さは 1 丈 7 尺(約 5.2m)、下地の防潮堤を越すこと 5 尺(約 1.5m)、警察付近を残し全て浸水した。横町では 8 尺(約 2.4m)、堀地・本城・平松の一部は床上に達し、波頭は嶋ノ神の畑地の北に及んだ。流失・倒壊は 136 戸、浸水 403 戸、死者 17 名、漁船流失 41 隻、耕地荒廃 6 町歩(約 60,000m²)、財貨の流出は数千万円である。沿岸の被害が特に大きく、見るに耐えない悲惨な状態であった。安全な場所は小学校・万福寺などである。ここに概況を記して、後世の参考の助けとする。

2.2 犠牲者供養

表-2 に犠牲者供養に関する津波碑の諸元を示す。

(1) 宝篋印塔

すさみ町周参見の萬福寺墓地内にある「宝篋印塔」(写真-7)は 1723 年に建立された。碑の表面が風化しており、碑文の内容がはっきりしないが、「宝永地震の津波による溺死者 134 人の供養のため建立された」と伝えられている。

正面：溺水死亡者奉納六十六部百三十四人為増進(以下不明)

(2) 南海大地震津浪遭難者供養像

「南海大地震津浪遭難者供養像」(写真-8)は田辺市新庄町の東光寺敷地内に建立された。供養像の台座正面には、1946 年の昭



写真-7 宝篋印塔

和南海地震の津波による遭難者の氏名が刻まれ、台座背面には古来より新庄の地を襲う津波災害について、特に昭和南海地震津波による被害状況の悲惨さが記されている。被災 30 周年に、遭難者の冥福を祈るとともに後世への警告とするため建立された。

台座背面：南海大地震津浪遭難者供養像

新庄の地は古来地震に伴う津波の害を受けること多く他の地方では想像もできぬ災厄を体験している 往古は知らず 天平知承の昔から 慶長九年 元禄十二年 宝永四年 安政元年夏冬等々にも多くの被害があった 中でも昭和二十一年十二月二十一日 突如として起った南海大地震による津浪は 道路田畑家屋等の破壊流出に加えて 死者二十二名 田辺市全体では六十九名に及び中には一家全滅の悲運にあった人もあった あゝ何たる天災だろう 今年その三十周年に当り 有志相謀り 多くの方々の協力を得て それら痛ましい遭難者の冥福を祈り 併せて後世子孫への警告とするために こゝにこの供養像を建立した 希くは魂魄とこしえに安らかに眠らせ給えと祈ると共に 吾等もまた過去の災害を再び繰り返すことの無いよう 万全の自戒努力を重ねたいものである

昭和五十一年九月吉日

表-2 犠牲者供養に関する津波碑の諸元

名称	地震津波名	建立年代	緯度	経度
宝篋印塔	宝永	1732年	33.54729	135.49640
南海大地震津浪遭難者供養像	昭和南海	1976年	33.71279	135.40265

表-3 偉業顕彰に関する津波碑の諸元

名称	地震津波名	建立年代	緯度	経度
故志士谷三郎左衛門氏記念碑	宝永	1927年	33.54562	135.49446
感恩碑	安政南海	1933年	34.02762	135.17188
梧陵浜口君碑	安政南海	1892年	34.01828	135.17539



写真-8 南海大地震津浪遭難者供養像



写真-9 故志士谷三郎左衛門氏記念碑

2.3 災害復興の偉業顕彰

表-3に偉業顕彰に関する津波碑の諸元を示す。

(1) 故志士谷三郎左衛門氏記念碑

すさみ町周参見の国道42号線脇に建立された「故志士谷三郎左衛門氏記念碑」(写真-9)には、宝永地震による津波の被害を受けた周参見浦に、波避堤を築いた谷三郎左衛門の偉業を称える内容が記されている。谷三郎左衛門が築いた波避堤(写真-10)により周参見浦は繁栄し、安政地震による津波被害は他の地と比べると少なかった。しかし、時間が経過し谷三郎左衛門の功績が忘れ去られよ



写真-10 周参見の波避堤

うしているため、記憶を新たにす目的で住民有志により建てられた。

(2) 感恩碑

1854年の安政南海地震の津波被害を受け、後世に発生するであろう津波に備え、巨額の私財を投じて高さ5m、幅20m、長さ600mの広村堤防を築いた浜口梧陵らの偉業に感謝するため、昭和8年に村人によって感恩碑(写真-11)は建てられた。大津波で亡くなられた人々の冥福を祈るとともに、浜口梧陵の遺徳を偲ぶ「津浪祭」が、毎年11月に感恩碑の前の広場で開催されている。「津浪祭」が始まる前に、地元の方々や広小学校・耐久中学校の生徒によって、堤防への「土盛り」が行われている。



写真-11 感恩碑

(3) 梧陵浜口君碑

広川町広八幡神社の境内に「梧陵浜口君碑」(写真-12)はある。浜口梧陵の死後、浜口家を継ぐ当主勤太に頼まれ、梧陵の功績を友人である勝海舟が書き記したものである。浜口梧陵は、広村堤防の築造だけではなく、若者の教育や政治家(駅通頭、和歌山県大参事、和歌山県議会初代議長などを歴任)としても優れた才能を発揮し、活躍したことが記されている。



写真-12 梧陵浜口君碑

2.4 津波到達記録

到達記録の碑は、碑が建立されている位置の津波水位やその位置が津波到達点であったことが記されているものである。津波到達記録は、一連の南海トラフ巨大地震による津波被害が甚大であった田辺市、白浜町と串本町に集中して設置されている。表-4に津波到達記録に関する津波碑の諸元を示す。表中の地盤高は、国土地理院の5mDEMによる標高値である。

(1) 田辺市新庄町

田辺市新庄町には、16基の到達記録の津波碑がある。地域で津波到達記録を積極的に残すことを検討しており、平成になってから

5基の到達記録の津波碑が建立された。図-2に田辺市新庄町における津波碑分布を示す。図中番号は表-4に対応している。

(2) 白浜町

白浜町には6基の到達記録の津波碑があり、そのうち5基は昭和南海地震による津波の潮位を記したもので、震災50周年の平成8年に建立された。また残りの1基は、昭和南海地震に加えて、1960年の昭和チリ地震によ

表-4 津波到達記録に関する津波碑の諸元 (その1)

番号	名称	地震津波名	建立年代	緯度	経度	地盤高, T.P. m	浸水深, m	津波高, m
1	南海道地震津波浸水水位	昭和南海	1991年(阪和銀行)	34.15430	135.21367	2.5	0.5	3.0
2	「由良町中央公民館」碑	昭和南海	1976年(由良町)	33.96005	135.11775	NaN	NaN	3.5*
3	南海道地震津波潮位標識	昭和南海	2005年(芳養公民館)	33.74887	135.35249	3.8	0.0	3.8
4	安政津浪の碑	昭和南海	1972年(新庄公民館)	33.72572	135.39949	3.6	4.3	7.9
5	安政津浪の碑	昭和南海	1972年(新庄公民館)	33.71939	135.40762	8.4	1.2	9.6
6	宝永津波の碑	宝永	2012年(新庄公民館)	33.71580	135.40657	5.3	8.4	13.6
7	安政津浪の碑	安政南海	1972年(新庄公民館)	33.71584	135.40641	5.3	2.1	7.3
8	安政津浪の碑	安政南海	1972年(新庄公民館)	33.69293	135.38881	3.3	3.9	7.1
9	南海道大地震津波潮位標	昭和南海	1991年(新庄公民館)	33.69297	135.38883	3.3	2.7	6.0
10	南海道大地震津波潮位標	昭和南海	1948年(新庄村)	33.72090	135.40182	2.8	1.3	4.1
11	南海道大地震津波潮位標	昭和南海	1948年(新庄村)	33.71814	135.40452	2.2	1.1	3.3
12	南海道大地震津波潮位標	昭和南海	1948年(新庄村)	33.71322	135.39867	2.1	1.6	3.7
13	安政津浪の碑	安政南海	1972年(新庄公民館)	33.71209	135.40256	5.6	3.0	8.6
14	南海道地震潮位 昭和21年12月21日	昭和南海	2010年	33.71181	135.40196	NaN	NaN	NaN
15	宝永の津波潮位(推定)	宝永	1998年(新庄公民館)	33.71125	135.40308	NaN	NaN	NaN
16	津浪之碑	宝永, 安政南海	1948年(新庄村)	33.71140	135.40304	NaN	NaN	NaN
17	津波潮位モニメント	安政南海, 昭和南海	1999年	33.69244	135.39071	NaN	NaN	NaN
18	南海道大地震津波潮位標	昭和南海	1948年(新庄村)	33.69107	135.39111	4.1	0.0	4.1
19	南海道大地震津波潮位標	昭和南海	1948年(新庄村)	33.71972	135.40603	4.5	0.0	4.5
20	南無阿彌陀仏 大津浪犠牲者供養塔	昭和南海(昭和チリ)	1961年	33.68578	135.35427	2.3	1.7 (0.2)	4.0 (2.5)
21	南海道地震による津波の潮位	昭和南海	1996年(白浜町)	33.68506	135.35410	2.1	1.6	3.7
22	南海道地震による津波の潮位	昭和南海	1996年(白浜町)	33.68025	135.38037	1.8	1.9	3.6

※矢沼ら(2015)より引用

表-4 津波到達記録に関する津波碑の諸元 (その2)

番号	名称	地震津波名	建立年代	緯度	経度	地盤高, T.P. m	浸水深, m	津波高, m
23	南海道地震による津波の潮位	昭和南海	1996年(白浜町)	33.65879	135.38651	3.6	0.5	4.0
24	南海道地震による津波の潮位	昭和南海	1996年(白浜町)	33.64140	135.40218	2.9	1.2	4.1
25	南海道地震による津波の潮位	昭和南海	1996年(白浜町)	33.67726	135.36077	2.3	1.8	4.1
26	昭和南海地震津波到達標柱跡	昭和南海	1996年(串本町)	33.48801	135.79324	4.4	0.0	4.4
27	昭和南海地震津波到達標柱	昭和南海	1996年(串本町)	33.47744	135.78303	4.7	0.0	4.7
28	昭和南海地震津波到達標柱	昭和南海	1996年(串本町)	33.47260	135.77986	4.2	0.0	4.2
29	昭和南海地震津波到達標柱	昭和南海	1996年(串本町)	33.46431	135.77880	4.1	0.0	4.1
30	昭和南海地震津波到達標柱	昭和南海	1996年(串本町)	33.46783	135.78047	3.8	0.0	3.8
31	昭和南海地震津波到達標柱	昭和南海	1996年(串本町)	33.47510	135.77504	5.3**	3.3**	8.6**
32	昭和南海地震津波到達標柱跡	昭和南海	1996年(串本町)	33.47348	135.77297	5.4	0.0	5.4
33	昭和南海地震津波到達標柱	昭和南海	1996年(串本町)	33.48316	135.77012	6.1	0.0	6.1
34	昭和南海地震津波到達標柱	昭和南海	1996年(串本町)	33.48308	135.76618	3.9	0.0	3.9
35	昭和南海地震津波到達標柱	昭和南海	1996年(串本町)	33.48516	135.76063	3.6	0.0	3.6
36	昭和南海地震津波到達標柱跡	昭和南海	1996年(串本町)	33.49025	135.73615	4.6	0.0	4.6
37	昭和南海地震津波到達標柱	昭和南海	1996年(串本町)	33.48708	135.71610	5.9	0.0	5.9
38	昭和南海地震津波到達標柱	昭和南海	1996年(串本町)	33.49348	135.70168	5.3	0.0	5.3
39	昭和南海地震津波到達標柱	昭和南海	1996年(串本町)	33.49251	135.68394	5.2	0.0	5.2
40	昭和南海地震津波到達標柱	昭和南海	1996年(串本町)	33.49222	135.66957	5.3	0.0	5.3
41	昭和南海地震津波到達標柱跡	昭和南海	1996年(串本町)	33.50251	135.65683	6.5	0.0	6.5
42	昭和南海地震津波到達標柱	昭和南海	1996年(串本町)	33.47181	135.80285	3.9	0.0	3.9
43	昭和南海地震津波到達標柱	昭和南海	1996年(串本町)	33.47387	135.80651	3.9	0.0	3.9

※矢沼ら(2015)より引用



図-2 田辺市新庄町における津波碑分布



図-3 白浜町における津波碑分布



図-4 串本町における津波碑分布

る津波の潮位も記されている。図-3 に白浜町における津波碑分布を示す。

(3) 串本町

串本町には、18 基の昭和南海地震による津波の到達記録の津波碑があり、全てが昭和南海地震の 50 周年である平成 8 年に串本町により建立された。串本町の到達記録は木製であり、経年変化による劣化が目立ち 18 基のうち 4 基がすでに朽ち果てなくなっている。当時の津波被害を伝える重要な史料であり、再設置が望まれている。図-4 に串本町の到達記録津波碑分布を示す。

3. おわりに

津波碑には過去の津波による被害状況が記されている。津波被害を軽減するための一助として津波碑は重要であり、津波碑に記されている内容を広く伝え、後世に伝承していくことが、来たるべき南海トラフ巨大地震に立ち向かうために必要である。

謝辞：本調査を行うにあたり、多くの現地の方々にご協力を頂きました。津波碑の現代語訳等には和歌山県立文書館にご助力を頂きました。ここに記して、感謝の意を表します。

参考文献

- 和歌山県立博物館（オンライン）：石に刻まれた災害の記憶 災害記念碑一覧，<http://www.hakubutu.wakayama-c.ed.jp/saigai/jisintunami-list.pdf>，参照 5-31-2016.
- 羽鳥徳太郎（1980）：大阪府・和歌山県沿岸における宝永・安政南海道津波の調査，東京大学地震研究所彙報，55，505-535.
- 矢沼隆，都司嘉宣，門田寛，佐藤雅美，芳賀弥生，今村文彦（2015）：和歌山県西岸における昭和南海地震津波（1946）及びチリ地震津波（1960）の津波高現地調査，津波工学研究報告，32，349-375.
- 和歌山県立博物館（2015a）：先人たちが残してくれた「災害の記憶」を未来に伝えるⅠ，和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会，6-7.
- 和歌山県立博物館（2016）：先人たちが残してくれた「災害の記憶」を未来に伝えるⅡ，和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会，10-11.
- 和歌山県立博物館（2015b）：先人たちが残してくれた「災害の記憶」を未来に伝えるⅠ，和歌山県立博物館施設活性化事業実行委員会，10-11.